

Anthony a Wood による *Athenae Oxonienses* 初版と 17 世紀イギリスの予約出版

高野美千代

Athenae Oxonienses (1691) and The Subscription Publication in Seventeenth-Century England

Michiyo Takano

Abstract

Anthony a Wood's *Athenae Oxonienses* is an indispensable piece of work for 17th century studies. It was published through subscription in 1691-1692. The subscription publication is a publishing method developed in seventeenth-century England, and it enabled the authors and publishers to publish more specialized, expensive, academic books. This study discusses how the proposals for printing *Athenae* were announced, who subscribed to it and for what reasons a list of the subscribers was revealed in the book.

The proposals were made by the London stationer Thomas Bennet several times, both in a printed prospectus and in the Term Catalogues, and there we can see from his advertisements when the book was meant to be published, how people could subscribe to it, how much the book cost and how they should pay, etc. Eventually in the very book a catalogue of the subscribers was inserted. The list shows the names and often the titles of over 300 people. Basically the names appear in alphabetical order, but those who bought a larger copy would come first, with an explicit dagger mark. Taken as a sort of paratext, the list would involve some special meanings. It could be regarded as the publisher's business tactics to attract more subscribers, as the subscribers' prestige, and as a sign of the writer's gratitude to the subscribers or even to the stationer who helped to publish the book itself.

キーワード：17 世紀イギリス アンソニー・ウッド 予約出版

Key words：17th Century England, Anthony Wood, Subscription Publication

はじめに

この論考で中心に取り上げるのは、17 世紀英文学において最も権威ある歴史的資料 *Athenae Oxonienses* (1691) である。ただし、この作品そのものの批評をするわけではない。注目するのはむしろテキストから離れた部分である。つまり、テキストを書物にするものは何か。ジェラルド・ジュネットは『スイユ』の中でパラテキストが果たす役割を論じた。書物を構成するテキスト以外

の要素は、そのひとつひとつがテキスト自体に、そして読み手に何らかの影響を及ぼしている。*Athenae Oxonienses* のサブスクライバーリストを、タイトルや装丁と同様にジュネットの言うパラテキストとして捉えたとき、それはわれわれ現代の読者に対しても、多大な情報を与え影響を及ぼすものとなる。本論考はこれを分析し、その意図、意味、価値の検討を試みるものである。

Anthony a Wood は 17 世紀イギリスを代表

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

する好古学者のひとりである。Wood は *Athenae* 以前にオックスフォードの歴史と故事をまとめた *Historia et Antiquitates Oxon.* (1674) を著している。この作品によって、Wood の名前は広く知れ渡ったわけであるが、のちの *Athenae* はさらに年月をかけて彼が執筆したイギリス文学史上最大の伝記作品であり、現代においても初期近代イギリス研究に不可欠な作品である。新DNBにおいて Graham Parry は次のように言う。

His biographical records in *Athenae Oxonienses* are indispensable, and without them, half the seventeenth-century entries in the *Dictionary of National Biography* could hardly have been written.¹⁾

Athenae 初版は 1691 年に出されたが、その巻末にはサブスクライバー一覧が含まれている。このリストによって、われわれのような現代の読者も、*Athenae* が予約出版という方式を利用して世に出されたことを一目で知ることができる。と同時に、この書物の予約購読者の面々を知るようになるのである。この論考においては、第一に予約出版についてその発祥、システムについて述べる。つぎに Wood が *Athenae* を執筆するにいたった背景を検討し、さらに *Athenae* のサブスクライバー募集の経緯を探る。最後に予約購読者一覧に記載された 300 人超のサブスクライバー像を概観する。また、一覧が単に予約購読者を示す資料という事実以外に、何を意図して一すなわち他者への宣伝、予約者への感謝、特殊な読者層の存在のアピールなのか？一挿入されたのか考察し、予約出版と予約者リストを手がかりに 17 世紀の出版事情を論じたい。

1. 予約出版とは

この論文で扱う「予約出版」は英語で言うところの "subscription" を指す。これは 17 世紀初期のイギリスで始まったもので、書籍等の出版に必要な費用（の一部）に充てるため購入予約者から前払い金を集める方式である。*Athenae* も予約

出版によるものであったが、これはどのようにして始まったのか、どのように発展したのか、例証してみよう。

イギリスにおける予約出版の最初の例としては、John Minsheu (1559/60-1627) が編纂した多言語辞書が挙げられる。これはフォリオ判で全 726 ページから構成され、しかもギリシャ、アングロサクソン、ヘブライ文字を含むものであった。時代的にはルネサンス期を迎えており、外国の文献が流入してきた当時のイギリスにおいて、この辞書が学術的に重要な意味を持つものであったことに疑いの余地はない。ただし、上記のように様々な言語（/文字）を含むなど、複雑な内容の辞書であったため、その製作コストは高額であった。採算を考えれば出版者も尻込みするし、資金不足で出版が困難であったのは当然のなりゆきと見えよう。著者は自らサンプルを持って宣伝に歩き、また、数名の有力なパトロンを得て、その結果この辞書 *Ductor in Linguas: the Guide into the Tongues* は 1617 年に出版が実現された。購入者数百名のリストはフォリオ判で 2 ページ分に記録されている。そこには国王、王妃、王子をはじめ大司教、貴族、政治家、そして大学図書館、大学関連の個人など 400 以上の名前が連なっている。

その後、イギリスで予約出版された書籍の早期の例としては、Brian Walton (1600? -61) の多言語聖書 *Biblia Sacra Polyglotta* (1657) がある。9ヶ国語、フォリオ 6 巻のこの聖書は、DNB の記述によれば、予約購読料が 10 ポンドとされ、当時の書籍としては極めて高価な部類に含まれる。購読料から、製作までのコストの高さを推測することができる。この例では、編著者以外の人物 John Pearson が宣伝を担当し、十分な経費が確保された。²⁾ また、Edmund Castell (1606-85) の七ヶ国語事典 *Lexicon Heptaglotton* (1669) も早期予約出版の例である。いずれの例も学術的価値が高く、また、複数の言語/文字を含む、コストの高い書籍である。このように、予約出版はより特殊な、あるいは学術的な書籍に適用された。Minsheu の辞書などは良い例であるが、初期には著者自身が出版費用を調達しなければならない

ケースもあった。その後、著者本人ではなく、出版者などが予約購読者を募るといった形が徐々に整っていく。

学術的価値が高く様々な分野において重要有益な書籍である本は、その一方で、学術性、専門性ゆえに販売部数は少ないものと見込まれる。さらには複雑な文字使いやプリントを含むことにより、製作コストがかさみ、ゆえに書籍の価格も上がる。採算が合わないと推測されるこのような書籍の取扱は、ビジネスリスクの高さゆえに書籍業者からはあまり歓迎されないものであった。そうなると Minsheu のように著者本人が費用を工面する必要が出てくる。Minsheu は *Ductor* 初版の購入者リストを 10 回も更新したというが、予約購読者に対する感謝の意を即座に示すための行為だったのだろうか。あるいは、さらに新規購読者を獲得するときの購買意欲刺激のための戦略として、著名人の氏名が数百も連なるリストを用意したのだろうか。John Feather は *A Dictionary of Book History* の中で後者を支持するコメントをしている。ただし、リストを暫時更新していくのは、念願の出版を実現するために寄与してくれた一種のパトロンへの謝意としてごく自然なものであり、すなわち前者を否定することも無論できない。

予約出版は出版費用の負担をする予約者/サブスクライバーからの援助で成立するのだが、その結果として予約者の氏名が公表されるケースを目にすることができる。その方法は様々である。たとえば書籍巻末にサブスクライバーの名簿が挿入されているものや、本文中の挿絵に個人の氏名や紋章が入っているものなどがある。Sir William Dugdale (1605-1686) の *Monasticon* (1655-1673) を例に挙げよう。この書籍は英国内の僧院について扱うものであるが、宗教的問題から共和政時代の風潮に合わない作品であり、出版を引き受ける書籍商も見つからなかった。また、エングレイビングによる挿絵が豊富であり、当然のことながら多額の製作経費がかかるものであった。Dugdale はエングレイビングを挿入するために 5 ポンドを負担してくれるサブスクライバーを募り、引き換えに、出版の際には費用を負担した人

物の氏名、紋章、モットーを挿絵に添えることを約束した。これは「書物」と言うよりも「挿絵」の予約/subscription となるが、資金確保に苦心した結果の方策であった。同様に、John Dryden の *The Works of Virgil* (1697) もやはり予約販売であった。取り扱い業者は当時の主要なロンドン書籍商 Jacob Tonson であった。5 ギニー支払った人は肩書きと紋章を挿絵に挿入され、2 ギニーの人の氏名は序文にリストアップされた。リストからは、様々な政治信条、職業、社会階級の人が入り混じってこの本の出版を支持していたことがわかる。書籍購入者を示す資料によって、今日我々も書籍の出版がどのような人物によって支持され補助されたのかを知ることができる。同時にリストアップされた人物以外の読者層の推測さえも可能となる。

2. *Athenae Oxonienses* と Anthony a Wood

Athenae Oxonienses はオックスフォード大学で教育を受けた、あるいは学位を認められた作家の伝記的記録を綴った Anthony Wood (または Anthony a Wood, 1632-95) の大作である。正式なタイトルは *Athenae Oxonienses. An Exact History of All the Writers and Bishops Who have had their Education in the Most Ancient and Famous University of Oxford, from the Fifteenth Year of King Henry the Seventh, Dom. 1500, to the End of the Year 1690. Representing the Birth, Fortune, Preferment, and Death of all those Authors and Prelates, the great Accidents of their Lives, and the Fate and Character of their Writings.* となる。さらに、*To which are added, The Fasti or Annals, of the said University, For the same time.* と続く。1500 年から 1690 年までに大学と関連を持った聖職者、執筆家が名を連ねている。書籍はフォリオ判で 2 巻から成る。第 1 巻は 1500~1640 年をカバーし、1691 年に出版された。Fasti を含めると 900 ページ近くある。³⁾ 第 2 巻は 1641~1690 年をカバーし、1692 年の出版で、906 ページのテキストである。オックスフォード大学の栄光を具現する書

物 *Historia et Antiquitates* の著者 Wood に対し、当時クライストチャーチカレッジの寮長であった John Fell が示した提案—オックスフォード大学関係の著者および聖職者の短い伝記を執筆すること—を継続、拡大した内容である。

現代においてもなお権威ある大作の *Athenae* を執筆した Wood 自身は、オックスフォード大学で教育を受けたあと、1656年、William Dugdale の著作 *Antiquities of Warwickshire* に出会った。そしてこの本に大いに感銘を受けたことは、彼の自伝的書物に記されているところでもある。

This summer came to Oxon "The Antiquities of Warwickshire," &c. written by William Dugdale, and adorn'd with many cuts. This being accounted the best book of its kind that hitherto was made extant, my pen cannot describe how A. Wood's tender affections and insatiable desire of knowledge were ravish'd and melted downe by the reading of that book. What by musick and rare books that he found in the public library, his life, at this time and after, was a perfect Elysium.⁴¹⁾

Dugdale の著作に啓発されて、自らも故郷 Oxfordshire に関する同様の書物を著作したいと考え、Wood はひたすら猛勉強に励むようになる。20年の歳月を経て1674年に *Historia et Antiquitates Universitatis Oxoniensis, duobus voluminibus comprehens: Oxonii, e Theatro Sheldoniano* として、この研究の成果は出版された。⁵⁾ フォリオ判で、ラテン語による著作である。1660年代から特に集中して研究に没頭してきた Wood は、怒りっぽい変人であるとの評価がオックスフォードにおいて定着しつつあった。だが研究に関しては多くの支援を受けた。たとえば、上記の *Historia et Antiquitates*…、そして *Athenae Oxonienses* 執筆・出版のため、当時オックスフォード大学における有力者であった John Fell からは

必要な資金的援助および執筆のヒントを、同じ好古学者の John Aubrey からは、有用な助言、多くの情報の提供を受けた。⁶⁾ Wood はこうして着実に *Athenae* 執筆を進めていった。

Wood は、引き続きオックスフォード大学図書館や大学の記録保管所を利用するほか、外部の文書局等を利用したり友人の Aubrey から資料を借用するなどして情報を収集した。そして *Fasti Oxonienses* という題で一種の付録をつけることとした。そこにはオックスフォード大学の役職、学位認定等が日付を含めて詳細に記録されている。さらにはオックスフォードで学位を授与されたケンブリッジ大学出身者をも含めている。これほどの大規模なプロジェクトに Wood は取り組んでいたのであるが、最終的に出版する際の問題となったのは資金である。*DNB* によれば、出版の資金は一部が Ralph Sheldon によって提供されたが、結局十分なものではなかった。⁷⁾ そこで、書籍商 Thomas Bennet が取り扱い予約購読方式を採用しての出版が企画されたのである。

3. *Athenae* の予約者募集

Athenae Oxonienses はオックスフォード大学で教育を受けたあるいは学位を授与された司祭や著者 (writers) の歴史をまとめた書籍である。1690年にはこの書籍を出版するにあたって予約購読者を募る印刷物 (proposals) が出ている。それによると、価格は通常のフォリオが20シリング、大型フォリオが30シリングとなっている。支払いは予約申し込み時、第1巻受領時、第2巻受領時の3分割となる。また、予約者以外には25シリング (大型版は40シリング) で販売予定であるとも添えている。最後には指定の取扱業者のリストがある。紙質と字体のサンプルとしてこの印刷物に添付された実際のテキストは、Henry Savile と William Camden の項となっている。

また、The Term Catalogues⁸⁾ では1691年の出版の前後に数回 *Athenae* の予約者募集の案内が出されている。これはまず1690年11月、Michaelmas Term 号に掲載された。著名な好古

学者・歴史家の Anthony Wood が著したイギリスの学識と学識ある者たちの歴史書として紹介される *Athenae* を予約購入する場合の案内は次のように示されている。

The Undertaker, Thomas Bennet, at the Half Moon in St. Paul's Churchyard, publishes his Proposals as follows: 1. That the Book shall be printed on the same Paper and Character as the Specimen. 2. That the Book shall consist of Two Volumes in Folio, of above 100 sheets each, in double Columns. Every Subscriber to pay 20s. in sheets for both; (viz.) 5s. at hand, 10s. at the delivery of the first, and 5s. at the delivery of the last: and for the large Paper 30s., at proportionable payments as before. 3. That the price to any other than a Subscriber shall be 25s. the small; and 40s. the large. 4. That the Book is already in the Press; and the first Vollume shall be delivered at Easter Term next, the second at Trinity. 5. All Gentlemen who subscribe, will have their Names, Titles, and places of abode, printed in a sheet annexed to the Second Vollume. The Specimens are delivered Gratis, and Subscriptions taken, by the Undertaker, and most Booksellers in London and the Country.⁹⁾

取り扱い業者は Thomas Bennet¹⁰⁾ で、彼の提案する募集内容がここには一通り示される。第一に、見本は実際の書籍と同じ紙質、字体であるという断りがされる。つぎに、本がフォリオ判の 2 巻本で、各 100 ページ以上、2 段組の構成となることが示される。さらに、製本していない状態での販売価格と支払い方式が、標準版、大型版についてそれぞれ説明される。各巻の出版予定時期は、第 1 巻が Easter、第 2 巻は（その 7 週後の）Trinity 期と説明される。また、予約者について

は、第 2 巻の巻末に予約者名簿を設け、氏名、身分、住所等が印刷されることをアピールしている。最後に予約方法が示される。見本が無料で入手できることも、ここでは記されている。

次の案内は、1691 年 2 月 Hilary Term 号に掲載された。ここで Wood は "History and Antiquities of the University of Oxford" の著者として紹介されている。新しい情報としては予約申し込み締切日が 3 月 16 日と示されることである。Term Catalogue における 3 回目の案内は、つぎの Easter 号（1691 年 5 月）に見ることができる。それによれば第 1 巻はすでに印刷完了しており、6 月 15 日には予約者に配布される手はずになっている。第 2 巻については印刷中とされる。また、予約済みあるいは予約予定であり、まだ支払いを済ませていない場合には至急支払うようにとの依頼も付け加えられている。さらに遠隔地に住む読者の便利のために予約受付が第 1 巻出版時までには延長されている。すなわち 3 ヶ月間の延長が提案されたことになる。（予約購入申し込みを行った人数は 3 百人程度と推測される。）

Term Catalogue の 1691 年 Trinity 号では *Athenae* 第 1 巻が出版の運びとなったことが明らかになる。そして第 2 巻については Michaelmas（11 月）の出版と予告される。しかし実際に第 2 巻が出版にこぎつけたことが知られるのは翌 1692 年の Trinity 号（6 月）の中である。6 月 27 日に予約者に配布予定と記されている。1692 年 Michaelmas 号からは *Athenae* の余剰が 50 部あることがわかる。25 シリング一括払いとされる。さらに 1695 年、Hilary 号（2 月）において、*Athenae* の余剰はなお 20 部あったことがわかる。

以上の情報が語る事柄を挙げてみよう。第一に、その価格である。フォリオ 2 冊で 20 ないし 30 シリングという価格は同時代の他の学術的書籍と比較した場合妥当なものと言える。テキストの量は莫大であるが、実際に地図や挿絵などコストのかさむ装丁がない書籍であるため、低価格に抑えることができたと推測される。ちなみに 1693 年版の William Camden の *Britannia* は地図など

のエンゲレイピングが含まれていることもあり、価格は 32 シリングであった。さらに大型のフォリオは 50 シリングとされた。

つぎに、予約購読者名の公表に関してである。予約購読は 17 世紀イギリスで始まったとされる出版方式であるが、予約者の氏名を公表するのも常套的であった。それには複数の意図がうかがえる。例を挙げながら考察してみよう。先にも触れたごく初期の予約出版例である Minsheu の辞書の場合、購読者リストはフォリオ判 2 枚にわたり、国王、女王、王子、大司教、有力貴族など個人名から始まり、続いて大学カレッジ、図書館などが名を連ねるものとなっている。また、大量のページを割いてサブスクライバーを公表した例に 1673 年出版の Richard Blome による *Britannia* がある。この本は 800 を超える予約購読者を獲得し、そのフォリオ巻末に 24 ページにわたって氏名、肩書き、住居、紋章を掲載している。地図やトポグラフィの専門書はコストの高い書籍である。彼は出版業者でもあり、同じ領域で活躍した John Ogilby とともに予約購読制を大いに利用して出版を行った。国王を筆頭とし、貴族、ジェントルマンなどつぎつぎにサブスクライバーの紹介をすることで書籍にプレステージとしての付加価値を与えたと推測できる。彼は 1674 年 (/1675) Guiliam の *Heraldry* を出版する際にも予約購読を募り、26 シリングの場合は本と紋章、46 シリングで本と紋章に加えて功績、モットー等エンゲレイピングをつけて紹介するとした。

加えて、サンプルとして示された項目に注目しよう。先にも述べたように、サンプルページは第 1 巻の中に収録された 2 人の人物の項から抜粋されている。William Camden と Sir Henry Savile である。ふたりは友人関係にあった。この 2 名についてのページが、読者獲得に有効であろう部分だからこそ選ばれたと考えるのは妥当だ。とりわけ Camden は多くの人々にアピールする力があつたと考えることができる。というのも、Camden はオックスフォード大学在学中から好古学的資料の収集を始め、大作 *Britannia* は 1586 年の初版以来、版を重ね、1607 年には第 6 版がフォリオ

判で出版された。初版から一世紀を越えてなお人々の関心は高く、1695 年にも英語の新訳版が出されている。また、Camden はロンドンの名門私学 ウェストミンスター校の教師でもあったことから、多くの名士たちにとって、身近な存在であったに違いない。

4. *Athenae Oxonienses* の予約購読者 (subscribers) たち

それでは、*Athenae* の予約者たちはどのような人物だったのだろうか。この本の取扱い書籍商 Thomas Bennet は、書籍販売業者を通じて予約者を募り、出版の際にリストによって予約者名を公表した。"A Catalogue of Part of the Subscribers to this Book" と題される 3 ページにおよぶリストにはアルファベット順に 329 人の名前が、その多くが簡単な肩書きと共に、記されている。アルファベット順とは言え、同じイニシャルの中では順不同となる。さらに "Above one third are omitted for want of Returning their Names by the Booksellers that subscribed for them." との断りがあり、個人名が明らかにならず掲載できなかったケースが 3 分の 1 以上あったことが示される。それに続けて、比較的大きなフォントで "Those that have this mark (†) are Large Paper." と書かれている。前述の通り、この書籍は当初より 2 種類のフォリオ判が使われた。大型フォリオは、通常のフォリオよりも高価であった。大型版購入者は名前のイニシャルのグループ内では前のほうに名前がおかれた。イニシャル E のグループを例に挙げてみよう。

E.

† JONATHAN Lord Bishop of Exeter.

Mr. John Edwards.

Mr. { Ellakar, Scrivener.
Edgley Minister of Wandsworth.
John Everingham Bookseller.

イニシャル E には 5 人の氏名があるが、第一に大型版の購読者エクセター司教の名前が出てきて

いる。これは、†のマークで明示される。続いて比較的著名である人物 John Edwards (おそらくコーパスクリスティカレッジ出身の聖職者、宗教論争家) が出てきて、残り 3 名にいたっては、括弧でひとくくりされている。出版者側から見て、あまり重要ではないらしい人物は一多くの場合、大学スタッフ、学生、書籍商であるが一かっことでひとくくりされている。これがリストの氏名掲載の典型的なパターンである。300 人を越えるリスト内の人物に関して、その多くは *DNB* で少なくとも簡単なプロフィールを知ることができる。だが、それ以外の、数割にあたる人物については詳細が判明しない。この小論では個人が特定できるケースを扱い、以下に購読者像を概観したい。

†マークがつき、大型版を購入したことがわかる人物、25 名にまず注目してみよう。肩書きからいくつかに分類することができる。まず王族、貴族等である。王族からは Her Royal Highness the Princess Anne of Denmark の名を挙げることができる。Anne (1665-1714) はジェームズ 2 世の娘であり、*Athenae* 出版時に女王であったメアリーの妹にあたる。のちの 1702 年には、女王に即位している。また、貴族階級からは Thomas Lord Viscount Weymouth を例に挙げよう。Weymouth 子爵、Sir Thomas Thynne (1640-1714) はオックスフォード大学クライストチャーチカレッジの出身である。政治活動も広く行い、名誉革命にも関与した人物である。*Athenae* には好古学者 William Burton の項において、彼の名前が出てくる。そこでは、1657 年、Burton が逝去した際に彼が所有していた好古学資料、写本、コイン等を Thynne が引き取ったという記述がある。その他、Henry, Duke of Beaufort すなわち Henry Somerset (1629-1700) など有力貴族が名前を連ねる。

つぎに英国国教会幹部に言及しよう。第一に目を引くのは大型版を 10 冊注文した Nicholas, Lord Bishop of Chester である。Nicholas Chester (1633-1707) はトリニティーカレッジの出身で、聖職に就いたあとは国王のチャプレンとなるなど重要な地位にあった。*Athenae* を購入

する頃には豊かな収入があったとされるが、10 冊注文した経緯については残念ながら不明である。さらには Thomas Lord Bishop of Rochester, Thomas Sprat を例に挙げよう。彼もやはり一度は国王のチャプレンに任命されている。やがて王立協会となる集まりにも加わっていた。

オックスフォード大学の幹部も名を連ねる。まずは 3 冊購入した Dr. Ralph Bathurst (1620-1704) であるが、彼はトリニティーの寮長を務めていた人物である。王政復古後、国王のチャプレン、王立協会のフェロー、1673 年から 3 年間はオックスフォード大学の副学長を歴任し、幅広い分野で活躍した。オールソウルズカレッジ学寮長であった Leopold Finch も 2 冊購入している。

今度は外部の人物に注目してみよう。政治の世界で活躍する面々、医学を専門とする面々が目立つ。まず、政治関連の人物を挙げると、Sir Thomas Rawlison (1647-1708) はぶどう酒商組合の会長で、のちにロンドン市長となった。1691 年当時はすでに Sir の称号を与えられ、ロンドンおよびミドルセックスの執政長官を務めていた。ちなみにオックスフォード卒ではない。Henry Guy (1631-1710) はクライストチャーチカレッジの出身で、この当時は国会議員であった。様々な重要な役職を歴任した、高教会派の人物であった。

医学者の例として、Francis Bernard (1627-1698) はケンブリッジ大学で医学を専攻し、国王の侍医を務めたこともある。語学に長けた博識の人物であり、豊かな蔵書コレクションを持っていたことでも知られる。医学者はほかにも複数いるが、中でも Phineas Fowk (1638-1710) などは珍しい例であろう。ケンブリッジ大学で医学を専攻し、ロンドンで医療に従事した。その一方で神学にも精通していた人物である。*DNB* によれば、オックスフォード大学に対し、特に名誉革命に関する大学側の方針に対して批判的であった。

以上のように、†マークのついた、すなわち大型判を購入した面々は主にその肩書きから分類することができる。オックスフォード大学に自らも関係した人物がほとんどで、当時の社会で重要な

ポストに就いていた人物が顔を揃えている。

それでは、一方の標準判を購入した人々について考察してみよう。大型判と比較して廉価であるとは言え、フォリオ自体が書籍として最も高額であったのは言うまでもない。したがって読者層も限定されることは確かである。約 300 人の氏名から判明することを述べたい。¹¹⁾ 先ほどと同様に、これらの人々はリストに掲載された肩書きによって大まかに分類することができる。貴族、教会関係者、大学関係者（および学生）、政治家、医学者、その他である。圧倒的にオックスフォード大学関連人物一司教、スタッフ、学生一が多いのであるが、これは自身に関して、或いは親族に関しての項目がこの書物 *Athenae* であるという点で当然想定されうる。大型判の購入者とくらべて目立つ違いは「その他」の部分であり、ここではじめて書籍販売業者 (bookseller) の肩書きを持つ人物が二十数名登場する。顧客の代理として予約したのか、後に販売する目的で一部購入したのか、純粋に個人的な趣味で講読を決めたのか、いずれかの目的があったはずである。しかも、ロンドンの主要書籍商だけでなく、地方の書籍商も含まれていることは注目したい。肩書きなしの例もあり、例えば "Mr. Morgan" のように、ただ苗字のみのケースさえある。このような場合は、予約購読者が自身の氏名をリストに掲載されることに何ら関心がなかったと推測される。書籍商の意図は全ての購読者に通じていたわけではなかったようだ。

むすび

Athenae Oxonienses は 1500 年から 1690 年までのイギリスの知識人の伝記を今に伝える貴重な書籍である。初版の巻末に添付された予約者リストは、このような学術的貴重書籍の出版を可能とした予約出版 (subscription) という方式をめぐる様々な事柄を物語っている。ジュネットが『スイユ』で言うところのパラテキスト—書籍のテキスト以外の部分で、テキストを書籍とする要素—が、このリストにも当てはまるものとすれば、リストは何重かの意味をはらむものとなる。

著者からすれば、数十年の歳月をかけて重ねた

研究の成果を本という形で世に送り出すための強力な助けである。前述の通り、パトロンからの援助だけでは *Athenae* 出版を実現する資金は十分でなかった。とは言え、著者自身が費用を工面するのは (Wood の気性、対人関係から見ても) 非現実的であった。ゆえに書籍商 Bennet が宣伝して資金を集め、出版を可能にした事実は、オックスフォード大学の名誉のために研究に没頭した著者にとって、きわめて貴重であったに違いない。

予約出版は、取扱書籍商からすれば第一にビジネスリスクを回避する手段である。支払いを 3 期に分けて受け付け、費用を必要な分ずつ順にまかなっていくのだから、非常に賢明な方式である。また、顧客確保のために様々な仕掛けを考える。と言っても、当時すでに慣習的に行われていたものであるが、予約販売で割引価格を提供し、通常販売との価格との対比を示す。さらに予約者リストを作成し公表すると宣伝することで一部の人々の関心を惹きつける。特に *Athenae* は出版前からオックスフォード知識人の中で話題になっている書籍であったため、リストの中身について、ある程度の想像は可能であったはずだ。さらに、大型判と標準判を用意することで、見込まれる購買層に対してさらに一種の優越と羨望の感覚を煽りたてるような狙いがあったのではないか。

予約購読者は出版の案内 (proposal) を読み、具体的に書籍の内容、装丁、活字フォントなどがイメージでき、価格や支払い時期も正確に知ることができ、しかも割引価格で購入できるのだから、不都合な点は何もなかったはずである。そして、よりエリート意識の強い一部の読者にとってみれば、予約者リストに大型判を購入した印である † マークつきで自身の氏名が掲載されることは間違いなくステータスシンボルであったろう。この特権的読者の存在を際立たせるやり方は、17 世紀の出版史における非常に興味深いひとつの新しい方策と言えよう。

最後に、予約出版および予約購読者リストが現代の読者にもたらす意味は何か。予約出版に関連した資料によって、出版当時の諸事情はつぎつぎと明らかになる。*Athenae* の場合は、出版部数の

推測も可能となる。出版事情を調査する際、プリントランはたびたび把握困難な問題であるのだが、*Athenae* のリストはそれを解決するヒントも含んでいる。リストアップされた購読者は 330 名程度で、リストに掲載されなかったケースが 3 分の 1 以上とされている。とすると、500 部かそれをわずかに上回る程度のプリントランであったことが推測できる。また、購読者名の中には、著者が綴った日記に名前が出る人々も多く、当時のオックスフォード大学を中心とした知識層の面々が明らかになる。さらに大学や教会関係者以外でどういった人々がこのような歴史的伝記作品に興味を持っていたのか、リストは明らかにしている。予約出版による出版でなければ知る術がなかったであろう事実を、現代の読者は受容することができるのだ。

テキストを書物にする際、(著者ではなく)書籍商が挿入したカタログには、購読者リスト以外に取扱書籍リストがある。これも 17 世紀半ばのイギリスで始まったものだ。取扱書籍リストが、既刊本、新刊本を紹介・宣伝し、新たな顧客を獲得するという、おもに商業的な狙いで挿入されていたものだとしたら、この購読者リストは同じ商業的な狙いでも、「事前に」客を確保するのが目的であった。商業的影響は出版実現後に消失し、それと引き換えに歴史的資料としての価値を得ることになるのである。

Selected Bibliography

- Arber, Edward, ed. *The Term Catalogues*. vols. I-III. Privately printed in London, 1903.
- Barnard, John and D.F. McKenzie, eds. *The Cambridge History of the Book in Britain Volume IV 1557-1695*. Cambridge: Cambridge UP, 2002
- Barnard, John. "Dryden, Tonson, and subscriptions for the 1697 Virgil", *PBSA*, 57, 129-51. 1963.
- Feather, John. *A Dictionary of Book History*. London: Croom Helm, 1986.

- . *A History of British Publishing*. London: Croom Helm, 1988.
- Papali, G. F. *Jacob Tonson, Publisher*. Auckland: Tonson, 1968.
- Parry, Graham. *The Trophies of Time: English Antiquarians of the Seventeenth Century*. Oxford: Oxford UP, 1995.
- Plant, Marjorie. *The English Book Trade*. London: Allen & Unwin, 1965.
- Plomer, H.R., et al. eds. *Dictionaries of the Printers and Booksellers Who were at Work in England, Scotland and Ireland, 1557-1775*. (London: Bibliographical Society, 1977)
- St. Clair, William. *The Reading Nation in the Romantic Period*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Wood, Anthony. *Athenae Oxonienses*. London, 1691-1692.
- ジェラルド・ジュネット『スイユ』和泉涼一訳、水声社、2001年

註

- 1) 新 *DNB* に名前を載せる 17 世紀の人物の多くについての記述は *Athenae* からの情報を基にしている。Graham Parry, "Wood, Anthony (1632-1695)", *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004 [<http://www.oxforddnb.com/view/article/29864>, accessed 14 Sept 2007]
- 2) John Pearson (1613-1686) は国教会司祭で、著者でもあったが、この多言語聖書に関しては執筆を担当しておらず、出版実現に力を尽くした。
- 3) 1 ページは 2 コラムからなる。1 コラムを数えているため、見開き 2 ページは 4 コラム = 4 ページとしている。
- 4) *The Life and Times of Anthony a Wood*, ed. Andrew Clark, abridged edn. with introduction by Llewelyn Powys (London: Wishart, 1932), p. 52.
- 5) そもそも Wood は様々な印刷物を収集しており、そのコレクションはのちに John Fell が耳にすることになるほどのものであった。現在ではボドリアン図書館に所蔵されている。7 千点に近い数のコレクションの内容は詳しく Kiessling がまとめている。Nicolas K. Kiessling, *The Library of Anthony Wood* (Oxford: Oxford Bibliographical Society, 2002).

- 6) ただし、*Athenae* の献辞を見ると、著者の感謝が示される相手はまず第一にオックスフォード大学総長として Prince James、つぎに副総長 Jonathan Edwards、そして大学のアカデミックスタッフに対してである。Jonathan Edwards (1629-1712) は神学博士で、*Athenae* 出版当時、1689年から1691年まで副総長を務めていた。Fell は当時既に逝去しており、しかも生前 Wood との関係が悪化してもいたためか、名前は現れない。また、著者本人の氏名も記載されていない。
- 7) Ralph Sheldon (1623-1684) は Wood のパトロンであり、共通の知的興味を持つ、数少ない彼の友人であり理解者であった。死後、40ポンドの遺産が Wood に渡された。
- 8) 1668年から1709年まで年に4回刊行された書籍カタログで、ロンドンで出版された全ての書籍を紹介する内容となっている。神学、歴史、詩など、主題ごとに新刊の書籍が紹介される。一方で再販された本の案内もなされている。そして各巻末には Advertisements として現在印刷中の書籍の出版予告も含まれる。
- 9) Edward Arber, ed. *The Term Catalogues*. 3 vols. (Privately Printed in London, 1903) vol. II, p. 343.
- 10) Thomas Bennet は当時の書店街 St. Paul's Churchyard に Half Moon という店を構えていた。彼に関する伝記的資料は少ないが、*Dictionary of Printers and Booksellers* によれば、おそらく書籍商の父親(同じく Thomas Bennet) を持ち、1687年から1706年に活躍した。父親とされる Bennet は、オックスフォードの出版社のロンドンにおける代理人であった。*Athenae* を扱った Bennet は、1687年に初めて *Term Catalogue* に登場し、その後頻繁に書籍を出版した様子うかがえる。オックスフォードで出版された書籍の販売も扱っていた。*Athenae* 内に2箇所彼が扱っていた本の広告があるが、そこに掲載された書籍は Shakespeare や Milton による主要文学作品と、説教集など宗教作品が中心となっている。価格の高い本が目立ち、*Athenae* の読者が将来的に顧客になる可能性を見込んでの広告としても納得できる。
- 11) 現在、リスト上のすべての購読者が特定できるわけではない。新 DNB を中心に様々な文献にあたってもなお人物が特定できなかつたり、十分な情報が得られないケースは数割ある。